

男子ハンドボール競技のバックコートプレイヤーの

1対1状況における有効的なフェイントプレー

—日本代表選手と韓国代表選手とを比較して—

谷之木 陵 (201111927, ハンドボール方法論)

指導教員：藤本 元, 會田 宏, 山田 永子

キーワード：日本と韓国, 韓国, 助走, フェイントの組み合わせ

【目的】

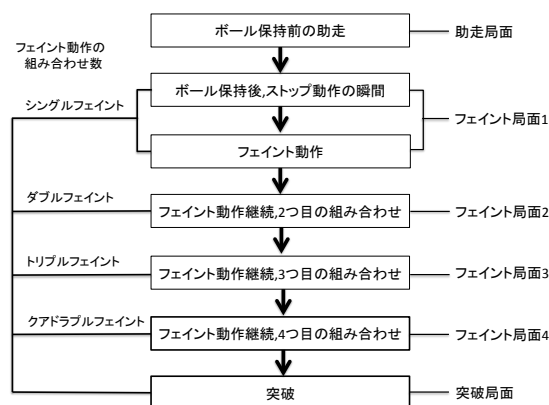
日本のハンドボール競技力の停滞は, 世界との体格面でのハンデキャップが要因の一つとして考えられる. しかし, 同様の問題を抱えている韓国は, 1988年のソウル・オリンピックで銀メダルに輝き, 機敏さ, フットワークを武器にハンドボール界に新たな新風を起こした.

日本が世界と戦っていくためには, 韓国の戦い方を参考に, 1対1状況におけるフェイントプレーをより有効的に利用する方法が考えられる.

そこで本研究では, 日本と韓国とを対象に, バックコートプレイヤーの1対1状況におけるフェイントプレーを比較することにより日本選手の課題を明らかにし, 今後ハンドボールを指導する際の有用な知見を得ることを目的とする.

【方法】

表1 フェイントプレーの局面構造



本研究では, 2008年から2012年までのアジア選手権, 世界選手権, アジアオリンピック予選, オリンピック最終予選における日本138シーン, 韓国127シーンを対象とした. 分析項目を局面ごとに以下のように設定した.

- ① 助走局面：助走スピード
- ② フェイント局面1：DFとの位置関係, DFとの距離, フェイント動作
- ③ フェイント局面2～4：組み合わせのフェイント動作, フェイント動作の組み合わせ数

④ 突破局面：プレー結果

統計処理はカイ2乗検定と残差分析を行った.

【結果と考察】

本研究の結果, 以下のことが明らかになった.

1. 日本と韓国のフェイントプレーの比較

① 日本と韓国の助走局面における助走スピードに有意な関係が見られ, 日本は韓国に比べて, 助走なし, もしくは助走なしでドリブルした後フェイント動作をすることが多いと考えられる.

② 日本と韓国のフェイント局面1におけるDFとの位置関係に有意な関係が見られ, 日本は韓国に比べて, DFに対して正面の位置関係になることが多く, 韓国は日本に比べてDFに対して利き手側ずれの位置関係になることが多くと考えられる.

③ 日本と韓国のフェイント動作の組み合わせ数に有意な関係が見られ, 日本は韓国に比べて, シングルフェイントを多く用い, 韓国は日本に比べて, トリプルフェイントを多く用いると考えられる.

2. 日本のプレー結果と分析項目との関係

① 日本のフェイント局面1におけるDFとの位置関係とプレー結果との間に有意な関係が見られ, 日本は, DFに対して利き手側, もしくは非利き手側にずれた場合は有効なフェイントプレーになると考えられる.

② 日本のフェイント動作の組み合わせ数とプレー結果との間に有意な関係が見られ, 日本は, シングルフェイントの場合は, 有効でないフェイントプレーになる傾向があり, ダブルフェイント, トリプルフェイントの場合は, 有効なフェイントプレーになると考えられる.

【結論】

日本と韓国を対象に, プレー結果と分析項目との比較と日本と韓国の比較を行った. その結果, 日本の課題は以下の通りである.

- (1) フェイント局面1では積極的に利き手側にずれて突破を狙うこと
- (2) フェイント局面2～4では, フェイント動作を組み合わせたフェイントプレーを習得すること